■字体の変遷

漢字の最も古いものは、亀の甲や牛の骨に刻まれた文字で、これを“甲骨文”もしくは“契文”と呼んだ、といふことはすでに述べた所である。その次に古いものは、金属の器具や石器・石碑などに刻まれた文字で、これを“金石文”と呼ぶ。“金石文”は、装飾的な意味もあって、古い契文よりも逆に絵画的である。

春秋時代（紀元前七七〇年～前四〇三年）から戦国時代（前四〇三年～前二二一年）にかけて、多くの古典が書き著されたが、この時代に用ひられた字体を“籀文（ちゅうぶん）”、もしくは“大篆（だいてん）”と呼ぶ。

秦の始皇帝が初めて中国全土を統一したので、それまでの各地の様々な字体を統一して“篆書”といふ字体を作ったことは、すでに述べた所である。この“篆書”は、籀文が“大篆”と呼ばれるのに対して“小篆”と呼ばれてもゐる。

秦は僅かに二世で滅びてしまひ、漢帝国（紀元前二〇二年～紀元八年）の二百年に亙る長い治世が続くのであるが、この時代に用ひられた字体は、今の楷書（かいしょ）体に近い“隷書（れいしょ）”と呼ばれる字体であった。この字体は、後漢（紀元二五年～二二〇年）の末に“楷書”が現れるまでの中心的字体となった。

後漢の末に、現在用ひられてゐる“楷書”といふ字体が作られるが、紙が発明されて、それまでの“木札”や“竹簡”に代って、比較的手軽に文字が記録できるやうになったことと関係があるのではないかと思はれる。

“楷書”とは、「きちんと整った書体」といふ意味の言葉である。これをやや崩した形の書体を“行書”と言ひ、大いに崩した書体を“草書”と言ふ。これらの書体が書体として確立したのは、五～六世紀の六朝時代である。